

目的 夏季高温地域の民家の微気候については、すでに、高知市、奄美大島などにおいて研究考察を行ってきたが、今回は、同じく太平洋岸にあって、日本の最南に位置する鹿児島県大隅半島において、この地方独特の建築様式である茅葺二棟造民家（接客及び就寝に使用される主屋と日常生活の場である釜屋が別棟になっている）の夏の室内気候の測定を行った。これと合わせて同一地域内の瓦葺二階建木造住宅についても観測し、両者を比較検討することによって、我国の伝統的な防暑対策の一端を知ることが目的とした。

方法 サーミスター抵抗温度計による外気及び室内の温湿度の測定を中心に、その日の天候状態を知るために毎時の水平面日射量の測定、さらに随時屋内外の風向及び風速の測定も行った。測定期間は、1971年7月21日より約2週間で、前半を茅葺二棟造民家の、後半を瓦葺木造住宅の観測にあてた。

結果 茅葺二棟造民家の室温は、日中外気温より低いが、瓦葺木造住宅の室温は、日中外気温と同程度か、部屋によってはむしろ高くなっている。茅葺二棟造民家の中でも、釜屋の方が開口部が広い、天井がないなどの点で特徴的な建物であり、事実釜屋に属する居間（ナカイ）の室温は、日中外気温よりも 4°C 前後低く、日較差は小さく、かつ最高最低起時は外気温に比べてかなり遅れており、ナカイの気候緩和作用の程度が特に大きいことが認められる。調湿作用も、茅葺二棟造民家においては十分なされていると考えられる。